

へき地小規模小学校におけるベースボール型授業の事例研究

高瀬 淳也¹, 森田 憲輝², 中島 寿宏³

Baseball-type activities of the small size elementary school in remote areas

Takase Jyunya¹, Morita Noriteru², Nakajima Toshihiro³

Abstract

There are many small size schools in remote areas in Japan. In Hokkaido, especially, approximately 40% of elementary schools (467/1174) are located in remote areas. For this reason, it is necessary to study the situations in remote areas and to analyze small size classes for educational improvement of Hokkaido. In particular, children exercise and collaborate with others in groups in physical education (PE) classes, so that the class planning of PE in small size classes is very important for remote areas. The purpose of this practical report is to propose a simplified baseball-type PE class structure for small size classes and to verify the efficiency of the class for children. This practical study was conducted in the 5-6th grade PE class in a remote area of Hokkaido. Participants were two 5th graders and one 6th grad elementary school children. The PE teacher sets a simplified baseball-type game using a tee and a guard fence. To limit the defense area, a guard fence is set between the first and second base area. The game begins with a scene that one runner is on the second base as an attacking side. First of all, the teacher hits the ball on the tee to the field between second and their base, and two defensive players try to catch the ball and make back home before the runner returns to the home base. According to the video recording of the game, children's conversations in the game, and children's work sheets, children learned their strategies and performed positive cooperation in the class. It should be concluded that the simplified baseball-type game even in a small size class could achieved the target of the PE class by devising a scene of the game.

Key words : Education in remote areas, Small size class, Baseball-type physical education class

はじめに

北海道は、全国のへき地小規模校の約2割を占めている(総務省, 2014)。また、北海道内においては、1174校ある小学校の約40%にあたる467校がへき地に位置しており(総務省, 2014)、へき地小規模校を対象とした教育研究や授業研究が重要となっている。へき地小規模校では、授業を構成する上で学級人数の少なさによる問

題が多く考えられる。全国へき地研究連盟(1999)は、少人数学級の問題点として「相互交流の相手が限定されるので、生活経験や学習経験が豊かにならず発展性に乏しい傾向をもつ」「妥協的になりやすく厳しい態度や活発な討議が展開しない」などをあげている。また、少人数学級では授業中の話し合い活動における意見そのものが少なくなる傾向にあり、授業内容の広がりや理解・思考の深まりが生まれにくく、他者からの視点をもとに自

1. 北海道鹿追町立上幌内小学校
〒081-0226 北海道河東郡鹿追町上幌内4線南3-17
2. 北海道教育大学岩見沢校
〒068-8642 北海道岩見沢市緑が丘2-34-1
3. 北海道科学大学
〒006-8585 北海道札幌市手稲区前田7条15丁目4-1

著者連絡先 高瀬 淳也
jtakase-syogakko@nexyzbb.ne.jp

1. Kamihoronai Elementary School
17-3, 4 Sen Minami, Shikaoui, Kato District, Hokkaido 081-0226
2. Hokkaido University of Education Iwamizawa
2-34-1, Midorigaoka, Iwamizawa 068-8642
3. Hokkaido University of Science
4-1, Maeda 7-jo 15-cyome, Teine Ward, Sapporo, Hokkaido 006-8585

分の考えを発展させる場面を作り出すことが難しい。

特に、「作戦を考えたり、互いの運動を見て教え合ったりすることの多い体育授業では、他教科に比べ、課題が多く見られる」（高瀬ら、2014）。へき地小規模校は複式学級がほとんどであり、どの学級においても人数が極めて少ないことが体育授業を構成する上で大きな問題となっている。立木（1992）は、少人数のために指導しにくい点として、「集団スポーツにおけるチーム編成がしにくい」「同学年の児童の中で体力・能力の差が大きく、運動嫌いな児童に意欲の低下が見られる」などをあげている。また、織奥（1993）は、小規模校における体育指導の問題として「個人差（能力差）が大きく指導が焦点化しにくい」「ボールゲーム・リレーの指導が困難である」など10項目をあげ、「各学校内において創意工夫に努力しても限界を感じられる」と報告している。多くのへき地小規模校の体育授業では、1～6年生までの全校児童が集まって合同で体育授業を行い（以下、本研究では「全校体育」と呼ぶ）、人数の少なさを補っている。しかし、全校体育では、年齢差や体格差による個々の運動技能差が大きくなり、低学年は技能の高い高学年から教えてもらえる機会があるが、高学年になるほど同じような課題をもって練習に取り組む仲間が少なくなる。このため、同学年で教え合ったり話し合ったりなど、協力して互いに高め合っていく「協働」が生まれにくく、結果的に教師の指導・助言に頼る傾向にある。小学校学習指導要領

（2008）では「協力、公正などの態度を育てる」ことが体育の目標として掲げられているが、上記のようにへき地小規模校での体育授業では児童同士が協力した学習機会がもちにくい。

特に、「ボール運動」の領域における「ベースボール型」では児童同士の関わる場面が重要となるため、へき地小規模校での実施には工夫が必要となる。ベースボール型は、攻守を規則的に交代し合い、一定の回数内で得点を競い合うことを課題としたゲーム（文部科学省、2008）であり、「走者が速いか、守備側の共同作業（以降、本論では連係プレー）が速いかを、特定の塁上で競い合うことにおもしろさがある（竹内ら、2006）。しかし、守備は各ポジションに分かれて行うため、「ゴール型」「ネット型」に比べ、人数の制約がある。また得点を防ぐために、話し合ったり意見交流をしたりなど児童同士が協働していくことは、授業でも重要な要素と言えるだろう。このようなベースボール型の特性を考慮すると、へき地小規模校における少人数という点が、児童の協働場面を設定するための大きな課題となる。

そこで本研究では、へき地小規模校の高学年少人数学級を対象とし、少人数でも協働や連係プレーを経験できるベースボール型体育授業を考案し、授業実践の中からその有効性について検討することとした。

表1 単元計画（全6時間）

時間	1・2	3	4 本時	5・6
学習内容	オリエンテーション バットスイングや捕球から送球の練習 ゲームの仕方を覚える	内野に打球が飛んだとき、守備の動きを考え、練習する。	外野に打球が飛んだとき、守備の動きを考え、練習する。	個々の課題を設定し、解決に向けて練習する。 ゲーム大会
学習の流れ	1 準備運動 ・縄跳び、遠投 2 個人技能練習 ・バットスイング～踏み込み、水平にスイングする ・捕球～打球に合わせてグロブの向き、打球を追いかける ・送球～捕球者に向かって、ボールを持った腕の肘を引き上げて投げつける 3 ゲームの説明 4 ゲーム 「Take 3 ボール」 （2時間目） 5 ゲームの改善点、個々の課題を話し合う 6 片づけ・整理運動	1 準備運動 ・縄跳び、遠投 ・キャッチボール、捕球練習 素振り練習 2 場の準備 3 めあての確認 内野にボールが飛んだとき、外野手の動き方を考えよう 4 試しの運動 5 全体交流 内野に捕れなかったときにカバーできるような場所に移動しよう。 4 技能練習 全体交流でわかったことを動きにいかす 5 ゲーム 6 場の片付け・整理運動	1 準備運動 ・縄跳び、遠投 ・キャッチボール、捕球練習 素振り練習 2 場の準備 3 めあての確認 外野にボールが飛んだとき、内野手の動き方を考えよう 4 試しの運動 5 全体交流 外野にボールが飛んだときは、外野手の送球がとれる場所へ移動しよう！ 4 技能練習 全体交流でわかったことを動きにいかす 5 ゲーム 6 場の片付け・整理運動	1 準備運動 ・縄跳び、遠投 ・キャッチボール、捕球練習 素振り練習 2 場の準備 3 めあての確認 個々の課題を出し合って、練習を考えよう 4 技能練習 個々の課題にあわせて、練習内容を考え、取り組む。 5 ゲーム大会 6 場の片付け・整理運動
評価	・活動場所の安全を確かめて、準備運動や練習をしようとしている。			・ルールやマナーを守り、互いに声をかけ合っている。
思				・自分の技能にあわせて作戦を立てたり、友達と動き方を考えたりする。
技	・後ろ足から前足に体重を移動させながら、バットを水平に振り、ボールを打つことができる。 ・打球の状況に応じて、走塁ができる。	・内野への打球を捕球して、一塁へ送球したり、捕球者のカバーができるように移動したりできる。	・外野への打球を捕球して二塁や本塁へ送球したり、捕球者の送球を受けられる場所へ移動したりできる。	

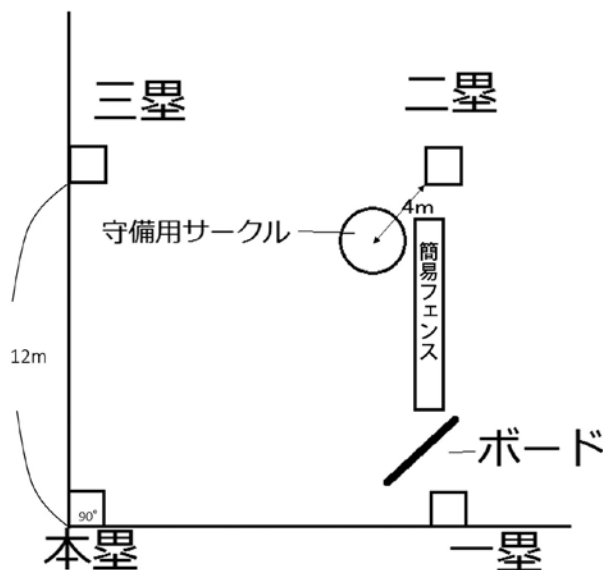
調査方法

1. 期日・対象

2013年6月下旬から7月上旬にかけて、北海道S町立K小学校の5年生男子2名、6年生男子1名の複式学級にて実施したベースボール型授業を調査対象とした。児童3名は、昨年度キックベースボールの学習を行っており、進塁の仕方、アウトの仕方は学習しているが、バットやグローブ操作については、授業で学習していない。

2. 単元・教材

今回の実践では、ティーボールを簡易化して全6時間の単元を構成し、分析対象とした。表1に本研究の単元構成と各時間での学習内容を示した。この授業実践では、守備の際に捕球から送球、ベースカバー、エラーのカバーなど、連係プレーの経験を通して、児童同士での意見交流やゲーム中の関わりなど協働の意識がもてることを重視した。授業では、3名でも実施が可能であるように、2人の守備と1人の攻撃を基本形として、表2のようなゲームを設定した。



- ・塁間を12mとした。
- ・ベースはランナーのみが使用する。
- ・本研究では、一塁手を置くことができないため、一塁に高さ140cm、横85cmの大原運動用品株式会社製ボール投げの板を設置し、送球がボードに当たったら一塁手が捕球したということにした。また、全員右打者のためレフトからセンター方向に打球が飛ぶと予想し、打球が行かないと予想される一塁から二塁の間に簡易フェンスを設置し、守備の負担軽減を図った。簡易フェンスは、幅100cm、高さ68cmのハードルを4台並べ、その上にブルーシートをかぶせた。
- ・二塁の前には、直径3mの守備者用のサークルを描き、ランナーと守備者の接触を防ぐようにした。
- ・バッティングティーは本塁上に置いた。

図1 フィールド全体の様子

3. 単元の評価規準

単元の評価規準として、表3のように3観点を設定した。授業では、毎時間の授業の様子をビデオカメラで撮影し、授業の終わりには感想を書かせた。それらのデータをもとに、評価規準に照らし合わせて評価を行った。

4. 分析方法

本研究では、授業成果の検証方法としてビデオ撮影による児童と教師の逐語録の作成と授業の様子の確認、そして、各授業で児童たちが記録する学習カードの内容を検討し、児童の発言、使用する言葉、授業中の動きの移り変わり、評価規準との照らし合わせから、授業の有効性評価を試みた。特に、今回のベースボール型授業においては、協働の高まりを主な成果として評価することとし、授業での協働の意識が見られたか、連係プレーができたかなどを確認した。



図2 場の設定 - 一塁側ボードと簡易フェンス

表2 ルール

- ＜チーム分け＞
 - ・守備者2名対バッター1名で実施して3回ボールを打ったら交代するローテーションを行った。
- ＜守備＞
 - ・ショートとセンターを守備位置とし、グローブを装着する。
 - ・ノーバウンドキャッチはアウトとなる。
 - ・捕球時、打者が一塁まで達していないときは一塁に置いてあるボードにボールを当てたらアウトとなる。
 - ・捕球時、打者が一〜二塁間を走っているときは、打者より早く送球や球を持ったまま運んだりして、二塁前のサークルにボールを届けたらアウトとなる。
 - ・打球が簡易フェンスに当たったときは、守備者がそのボールを捕りに行き、プレーを続行する
- ＜攻撃＞
 - ・バッティングティー（三角コーンの上に牛乳パックを乗せたもの）上にボール（ナガセケンコー社製ケンコーティーボール11インチゴム）を置き、打撃をしてゲーム開始となる。バットは、長さ65cmの木製バットと72cmの金属製バットの二種類準備し、扱いやすい方を選択させた。
 - ・フェアゾーン（一塁ラインと三塁ラインの間）の角度は90度に設定した。打球がフェアゾーンに入らなければファウルとなる。三振はなしとした。
 - ・打撃後は二塁まで走塁する。一塁に進塁したら1点、二塁まで進塁したら2点が加えられる。
 - ・続けて2回打撃をし、その後に打撃と守備を交代する。
 - ・アウト・セーフについては児童のセルフジャッジとし、判定が難しいときは授業者が判定するかプレーをもう一度やり直すこととした。

表3 評価規準

(1) 運動への関心・意欲・態度	(2) 運動についての思考・判断	(3) 運動の技能
1) 活動場所の安全を確かめて、準備運動や練習をしようとしている。 2) ルールやマナーを守り、互いに声をかけ合ってゲームしたり、進んで準備や片付けをしたりしている。	1) 自分の技能にあわせて作戦を立てたり、友達と動き方を考えたりする。 2) 課題を設定し、解決に向けて練習方法を考えたり、動き方を工夫したりしている。	1) 後ろ足から前足に体重を移動させながら、バットを水平に振り、ボールを打つことができる。 2) 打球の状況に応じて、走塁ができる。 3) 打球を捕球し、進塁や得点を防ぐよう送球ができる。 4) 打球を捕らないとき、友達の守備をカバーしている。

結 果

1. 1, 2時間目の授業から

本単元の流れを伝えた後、グローブでの捕球技術の指導をした。児童にとって初めてのベースボール型授業であるため、グローブ・バットの持ち方と使い方について授業の最初に指導を行った。その後、ゲームについて説明し、表2に示したルールに従って実際に取り組んだ。1時間目は空振りや捕球エラーが多く、ゲームそのものが成り立たなかったが、2時間目もグローブでの捕球技能、バッティング技能の練習に時間をかけたところ、どちらの技能もゲームに支障がない程度まで身に付いた。児童相互の協働性については、特に観察されず、個人の技能練習が主な活動であった。

2. 3時間目の授業から

この回の授業では、話し合いの中でボールを持たないとき、味方のサポートやカバーをする連係プレーの意識を持てるように課題を設定した。試しの運動では、「どこへ動けばよいか」ということについては、「内野手がエラーしたときのカバーがしやすいように」という考えを3人とも意識することができていた。そこで「いつ動くときよいか」ということを確認するために、バッターには、打っても走塁せずに守備者2人の動きを注視するように指示した。その後、もう一度集まって動きの確認をした。

授業の展開部での話し合いでは、ボールが内野に転がったときに外野手は内野手のエラーに対応できるようボールの方向へ動くということを学習することができた。この後、授業者がボールを打ち、外野手がカバーする動きの習得を目指して練習をした。2時間目の時にも、すでに外野手はボールの方向へ移動することもあったが、本時の学習を通してその動きの目的を理解し、意図的に動いている様子が見られた。

<ビデオ映像での観察記録例1：授業の導入部>

授業者：今日から守備について学習します。内野にボールが転がったとき、内野手はボールを捕って一塁へ送球するよね。外野はどうする？

児童K：もしも、内野がエラーしたとき、ボールの方へ

移動する。

授業者：内野の人が、ぼろっとエラーしたときに、外野の人が捕りに行くようにするの？

児童Y：いや、ちがう。外野もボールの方向に行かなくちゃだめ。

授業者：本当？ボールが例えば、ライト方向に行ったとき、外野はどっちに動くの？右？左？

児童Y：ボールの方向。

授業者：いつ、動くの？

児童K：バッターが打った瞬間。

授業者：バッターが打った瞬間、右や左に動くの？

児童K：いや、打球の方向を見て動く。

授業者：今日の勉強で考えることが見えてきたね。内野にボールが転がったとき、外野は、まず「いつ動けばいいのか」そして、「どこに動けばいいのか」。これを考えてみよう。

<ビデオ映像での観察記録例2：授業の展開部>

授業者：どこに動けばいいと思った？

児童K：ボールの方向。内野手が捕れなかったときに、すぐに助けられるようにする。

授業者：それを、「カバーする」と言うんだね。じゃ、いつ動いたらいい？

児童Y：打った瞬間に動かなければならない。

授業者：打った瞬間？内野手がエラーしてからでもいいんじゃないの？

児童Y：それだと、遅すぎる。

授業者：そうだね。打った瞬間に動かなければ、カバーにならなよね。それじゃ、打球がもし真ん中に行ったら外野はどうしたらいい？ボールと同じ方向にいるから、動かなくてもいいんじゃないの？

児童R：それだと助けられない。ボールの方に近づいていかないとけない。

<学習カードの記録1>

・外野で内野の人のカバーすることができてよかったと思います。(児童R)

・前に比べてボールを落とすことが少なくなった。守備のことについてわかりました。(児童K)

・外野の人がボールの方に動いて、内野の人が捕らな

かったボールを捕ることがわかった（児童Y）

3. 4時間目の授業から

準備運動では基礎的な技術であるキャッチボール、バッティング練習をした。前回に比べ、バッティング、グローブ捕球技能に上達が見られた。その後、本時の課題設定を行った。4時間目では、課題の把握の場面で児童たちは内野手の動き方について予想することができていた。授業者は、その児童たちの予想にもとづいて実際の運動として試してみることで、より連携に関わる理解を深めさせようと考えて、「守備はいつ動いていた？どこへ動いていた？」と発問し、本時の課題の解決ができるように促した。

<ビデオ映像での観察記録例3：授業の導入部>

授業者：前の時間は、外野の人に注目した学習をしました。内野にボールが転がったとき、外野はエラーしたときのカバーをすることが大切だという学習をしました。今日は、外野にボールが飛んだとき、内野の人はどうしたらいいかな？外野の人がエラーしたら困るから、後ろの方に走っていく？

児童Y：いや、ちがう。いらない。二塁に移動して、外野の送球をもらえるようにした方がいい。

授業者：え？本当？カバーに行かなくてもいいの？じゃ、この場面について今日は考えてみよう。外野にボールが飛んだとき、内野の動きを考えるよ。「どこへ」「いつ」について、試しにやりながら考えてみよう。

<ビデオ映像での観察記録例4：授業の展開部>

（括弧は、筆者がつけたしたもの）

授業者：どうでしたか？

児童K：内野の時、最初はがんばってボールを捕ろうとして動いたけれども、捕れなかったら丸の中（二塁）に走った。

授業者：それ、いいよね。「どこに」は二塁にだね。まちがいない。いつは？もう一度教えて。

児童Y：ボールを捕ろうとして、捕れなかったら二塁へ行って、外野のボール（送球）を捕れるようにする。

授業者：ボールの方向に関係なく、（内野が）最初から二塁に行ったらどうだ？

児童Y：だめ。内野（で守る）が意味がない。

授業者：そうだね。内野手も、まずは打球を捕ろうとしないとダメだね。それで捕れなかったら二塁へ移動して、外野のボールを捕る準備をすることが大切なんだね。

<学習カード記録2>

- ・内野が捕れなかったら、二塁へ動けた！（児童R）
- ・二塁の人は、外野の人に半分開くらい近づいていることがわかった。（児童Y）

Take3 ボール		感想カード
名前		
1 ふかく心にのこることや、かんだうすることがありましたか。	☒	・どちらでもない・いいえ
2 今までできなかったこと（運動や作戦）が、できるようになりましたか	☒	・どちらでもない・いいえ
3 「あつ、わかった！」とか「あつ、そうか」と思ったことがありましたか	☒	・どちらでもない・いいえ
4 せいじっぱい、ぜんりよくをつくして運動することができましたか	☒	・どちらでもない・いいえ
5 楽しかったですか	☒	・どちらでもない・いいえ
6 自分から進んで学習することができましたか	☒	・どちらでもない・いいえ
7 自分のめあてに向かって何回も練習できましたか	☒	・どちらでもない・いいえ
8 友だちと協力して、なかよく学習できましたか	☒	・どちらでもない・いいえ
9 友だちとおたがいに教えたり、助けたりしましたか	☒	・どちらでもない・いいえ

一言！「外野の人がボールの方にうごいて内野の人がボールを捕ることがわかった。」

Take3 ボール		感想カード
名前		
1 ふかく心にのこることや、かんだうすることがありましたか。	☒	・どちらでもない・いいえ
2 今までできなかったこと（運動や作戦）が、できるようになりましたか	☒	・どちらでもない・いいえ
3 「あつ、わかった！」とか「あつ、そうか」と思ったことがありましたか	☒	・どちらでもない・いいえ
4 せいじっぱい、ぜんりよくをつくして運動することができましたか	☒	・どちらでもない・いいえ
5 楽しかったですか	☒	・どちらでもない・いいえ
6 自分から進んで学習することができましたか	☒	・どちらでもない・いいえ
7 自分のめあてに向かって何回も練習できましたか	☒	・どちらでもない・いいえ
8 友だちと協力して、なかよく学習できましたか	☒	・どちらでもない・いいえ
9 友だちとおたがいに教えたり、助けたりしましたか	☒	・どちらでもない・いいえ

一言！「内野の人はカバーのいにはんぶんくらい近づいてとることをわかった。」

図3 学習カードの例（上3時間目 下4時間目） 児童Y

- ・外野の人がボールの方に動いて内野の人がボールを捕れなかったら、ボールを捕ることがわかった。（児童K）

4. 5, 6時間目の授業から

5, 6時間目は、今まで学習してきた中で自分が特に練習したいことを出し合った。3人とも、エラーカバーなど関係プレーについては特になく、グローブ操作と打撃の練習がしたいと話してきた。そこで、捕球・打撃の練習時間を授業の前半に設定した。5時間目の補球の練習では、授業者も入り、ローテーションをしながらの2人1組のキャッチボールをした。児童からは、「ナイス」「いいよ！」「ごめん」などの声かけがあった。6時間目の捕球の練習では、3人が一直線にならび、中継プレーをイメージした練習を行った。この時間でも、捕球を失敗してボールを下に落とす場面が多かったことから、集合をかけて説明したり、個別指導をしたりした。打撃練習では5, 6時間目ともに、ゲームと同じようにバッティングティーの上にあるボールを打った。その際、守備の補球練習もあわせて取り組んだが、捕球しない児童は3時間目に学習したエラーカバーの動きができていた。このような練習のあと、5, 6時間目ともにゲームをした。ゲームは、1人2打席ずつを2回行った。

<ビデオ映像をもとにした授業の様子の確認：ゲーム中の児童の動きと声かけ 6時間目ゲームから、関係プレーが必要であったプレーを抽出>

- ・守備側は内野手と外野手の2名。バッターの打撃後にボールを捕れなかったため、二塁に立ち外野からの送球を受ける準備を行う。外野手は、バッターが打ったと同時にボール方向へ前進。内野が捕れないボールを捕球後、二塁へ送球する。
- ・バッターの打球が内野手へのフライとなる。内野手が前進して捕球しようとしたがエラー。すぐにボールを拾う。外野手は打撃後に前進とともに、「捕れる!」と内野手に声をかける。エラーに気づきボールを捕ろうとするが、内野手が捕球したことを確認し、励ましの声を送っていた。
- ・バッターの打撃後、内野手はボールの方向へ体向けのるが、外野が捕球すべきであると判断し、そのまま二塁へ移動し外野手からの送球を待つ。外野手はボールが飛んだライト方向へ移動後、ワンバウンドでキャッチし二塁へ送球。打者が到達する前にボールを二塁に届け、走塁することを阻止することができた。
- ・バッターの打球がピッチャーマウンド付近への内野ゴロとなる。内野手は前進して捕球後、そのまま一塁へ送球しアウトとすることができた。外野手は前進しながら「一塁、一塁（へ送球）」と声をかけていた。

5. 3～6時間目までのゲームの得点

表4 3～6時間目までのゲームの得点

3時間目	児童	①	②	合計
	K	0	1	1
	R	2	0	2
	Y	1	1	2

①一打席目 ②二打席目

4時間目	児童	①	②	合計
	K	0	0	0
	R	2	1	3
	Y	1	1	2

①一打席目 ②二打席目

5時間目	児童	①	②	③	④	合計
	K	1	0	1	1	3
	R	2	2	1	1	6
	Y	1	0	1	1	3

①一打席目 ②二打席目
③三打席目 ④四打席目

6時間目	児童	①	②	③	④	合計
	K	1	1	1	0	3
	R	1	1	1	1	4
	Y	2	1	1	1	5

①一打席目 ②二打席目
③三打席目 ④四打席目

考 察

本研究では、へき地小規模校におけるベースボール型ゲームの有効性について検討した。全6時間の授業をビデオで撮影しその様子を観察した結果、少なくとも以下

のような授業成果が確認された。

- ・外野にボールが飛んだとき、内野手が中継プレーに備えて移動できるようになった（評価規準（2）の2）。
- ・内野ゴロの際、内野手のエラーに対応するよう外野手もボールの方向へ移動するようになった。また、授業が進むにつれて、内野手がどこに投げればよいのか、外野手が声をかけて指示する場面が多くなった（評価規準（2）の1）と2）。
- ・グローブでの捕球技能、バットで打球を打つスイング技能の向上が見られた（評価規準（3）の1）と3）。
- ・仲間を意識してプレーする動き方を理解し、技能が身に付くにつれて「ナイス」「ドンマイ」などの声かけができるようになった（評価規準（2）の1）と（3）の4）。

これらのことから、内野手と外野手は打球やもう1人の守備に合わせて動いている状況が見られるようになり、少人数であっても動きの中で協働といった意識をもたせることができたと考えられる。学習カードからは「内野で捕れなかったら、二塁へ動けた!（評価規準（2）の1）、2）と（3）の4）」、「二塁の人は外野の人に半分くらい近づいていることがわかった（評価規準（2）の1）」など、他者の動きと自分の動きを合わせて意識していることが確認できる記述もあり、本研究が3名のベースボール型の教材として有効であったと考えられる。清水ら（2013）が行ったベースボール型授業の報告では、守備時の状況判断力の向上を目指した授業実践が行われ、児童たちの守備への意識や連携プレーの効率化という成果が確認されている。また、岩田ら（2008）のベースボール型授業実践では、打球の種類による守備側プレーヤーの役割について意識させることで、児童の状況判断や連携の向上といった成果を得られている。これらのように、過去に報告されているベースボール型の授業は普通学級を対象とした授業での成果であるが、本研究では3名という少人数での授業においても、同様の成果が確認された。これらのことから、へき地小規模小学校のベースボール型授業であっても、小学校学習指導要領の体育の目標にある「各種の運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにする」「その特性に応じた基本的な技能を身に付け、体力を高める」「協力、公正などの態度を育てる」の達成や、ベースボール型授業に求められている、「簡易化されたゲームで、ボールを打ち返す攻撃や隊形をとった守備によって、攻防をする」という学習を経験させることが可能であると言える。また、本研究で習得した技能や戦術を基礎として、中学校入学後のベースボール型体育授業で学習する中継プレーやダブルプレーなど、より高度な連携プレーの習得につながっていくことも期待できる。

へき地小規模小学校においては、ボール運動領域のように人数が必要な学習形態では協働した学習場面の設定が難しく、ボール操作に関する個人技能が学習内容の中

心となってしまう、当該学年で身に付けさせたい集団としての技能や協力する姿勢を十分に習得させづらい実態も見受けられる。しかし、本研究のように教材や学習内容の工夫により、少人数でも集団ゲームの学習成果を得ることが可能であると考えられる。今後はこのような実践報告が数多くなり、へき地教育の発展につながっていくことを期待したい。

今回の授業では、へき地小規模小学校1学級での実践であったため、今後は他の学級や学校での実践を重ねて、授業成果の検証のためのさらなる分析が必要である。また、授業成果の評価方法が逐語録や学習カードといった児童の主観的感想がもととなっており、正確な評価のためには客観的指標を用いることが求められると考えている。

まとめ

本研究では、へき地小規模小学校の児童を対象としたベースボール型体育授業の実践を行った。少人数学級では協働や連係プレーの場面が設定しづらいと考えられるベースボール型授業において、教材や学習内容を工夫することで、少人数でも児童にとって学習成果が期待できる授業実践が可能かどうかを検証した。授業成果はビデオ撮影による授業観察と児童の学習カードの内容で評価することとした。その結果、授業では場の設定や教師の働きかけ、守備についての連係プレーを重視した学習内容とすることで、3名の児童によるベースボール型体育授業でも一定の学習成果が得られることが確認された。

参考文献

- 岩田 靖 (2012) 体育の教材を創る。大修館書店：東京，pp. 179-196.
- 岩田 靖・竹内隆司・大野高志・石井克之 (2008) もっと楽しいボール運動①「フィルダーベースボール」の教材づくり。体育科教育，56 (11)：60-65.
- 文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領。東京書籍：東京，p. 97.
- 文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領解説体育編。東洋館出版：東京，p. 18.
- 織奥信夫 (1993) 小学校の小規模校における体育授業に関する研究：極小規模校の教科体育経営について。体育・スポーツ経営学研究，10 (1)：57-72.
- 清水 将・浜上洋平・中嶋基樹 (2013) 守備側の判断と投能力の向上を企図した連携バックホームベースボール。体育科教育，61 (10)：18-21.
- 総務省統計局。第六十三回日本統計年鑑平成26年第22章教育22-3都道府県別小学校。 <http://www.stat.go.jp/data/nenkan/zuhyou/y2203000.xls>，(参照日2014年3月28日)。

- 高瀬淳也・中島寿宏 (2014) へき地小規模小学校におけるICTを活用した体育授業の実践：交流の広がりを目指した授業事例から。教材学研究，25：231-238.
- 竹内隆司・岩田 靖 (2006) 小学校体育における守備・走塁型ゲームの教材づくりとその検討－特に、守備側の戦術的課題を誇張する観点から。信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要・教育実践研究，7：81-90.
- 立木 正 (1992) 東京都区内の小規模学校における小学校体育の現状と課題。東京学芸大学紀要5部門，44：149-157.
- 全国へき地研究連盟編 (1999) 学習指導方法の工夫・改善～へき地・小規模・複式学級を有する学校の実践的事例：東京，p. 17.

〔平成26年4月16日 受付〕
〔平成26年8月30日 受理〕